

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520701

研究課題名(和文) グローバル社会における「日本人英語」に対する態度と容認度の包括的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on attitudes toward accented English and the perceptions of Japanese English in a global era

研究代表者

柴田 美紀 (Shibata, Miki)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：90310961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：自らの英語に否定的態度は日本人英語学習者に特有か(疑問1)、ジャパニーズ・イングリッシュは日本人以外には理解してもらえないのか(疑問2)を検証した。疑問1には7か国290名がアンケートに回答し、結果は、日本人グループが自らの英語に対する自信、満足度、保持する姿勢のいずれも顕著に低く、発話に対して消極的であった。疑問2は8か国332名(英語母語話者は一般人)に4名の日本人男性の英語を聞いて、理解や印象など10項目を判断してもらった。結果は、ネイティブの発音に近いと容認度、好感度も上がるが、英語母語話者の判断は日本人が危惧するほど低いわけではなく、むしろ他の非日本人グループより高い結果となった。

研究成果の概要(英文)：The study investigated whether only Japanese speakers of English negatively perceive their own accented English or if non-Japanese also consider Japanese-accented English difficult for others to understand. A total of 290 participants from 7 countries judged their own English through a questionnaire. The results found that Japanese had the most negative attitudes toward their own English; they were neither confident nor happy with their own English, and had little desire of maintaining it as it was. In addition, they were hesitant to speak, as they felt self-conscious about their accented English. For the second question, the participants from the first survey and 44 Americans judged 4 Japanese male English users for 10 items including comprehension, intelligence, and fluency. Overall, the more native-like a speaker was, the more positively he was judged across the groups. Interestingly, however, Americans tended to accept the strong Japanese-accented English more than other groups.

研究分野：第二言語習得

キーワード：ジャパニーズ・イングリッシュ リンガ・フランカ英語 言語態度

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進む社会で言語や文化を異にする人々との対話が増え、英語がリンガ・フランカ(English as a lingua franca、ELF)として広く使用されている。こうした ELF には、母語話者英語とは異なる言語的特徴が認められるが、これらは体系的かつ規則的に表れ、コミュニケーションを妨げるものではない(Jenkins, 2000; Seidlhofer, 2004)。したがって、話者が非英語母語話者であっても、ELF の特徴は非母語話者あるいは英語学習者の「誤り」とは見なされない。広義ではジャパニーズ・イングリッシュも ELF であるが、これまでの研究で、日本人英語学習者は自らの英語に否定的でその使用には消極的であることが報告されている。例えば、Chiba, Matsuura, and Yamamoto (1995) では、日本人英語話者 3 名、アメリカ英語話者 2 名、イギリス英語話者 1 名、スリランカ、香港、マレーシア出身の ESL 英語話者各 1 名合計 9 名(いずれも男性)の英語、特にアクセントの容認度について調査した。その結果、日本人大学生はアメリカ英語とイギリス英語のアクセントは容認するが、日本人を含めた非英語母語話者の英語アクセントに対しては否定的であることが明らかになった。Matsuda(2003)のアンケート調査と事後インタビューの結果は、日本人高校生がイギリス英語やアメリカ英語が標準であり、日本人英語は「正確でない、理解できない、格好良くない」とみなしていることを明らかにした。

2. 研究の目的

そこで本研究ではこれまでの研究結果をふまえ、以下の疑問を検証する。

疑問 1: 自らの英語に対して持つ否定的な言語態度は日本人英語学習者に特有なのか。

疑問 2: 日本人英語は日本人以外の英語使用者らに理解されないのか。

3. 研究の方法

(1) 疑問 1 は、オーストリア(31 名)、ドイツ(27 名)、デンマーク(48 名)、マレーシア(62 名)、中国(57 名)、日本(44 名)、カザフスタン(21 名)合計 290 名の大学生(一部大学院生)に自らの英語アクセントについてアンケート調査を行った。アンケートは 10 項目からなり、その回答にはリッカート尺度法(1=「全くそう思わない」から 6=「とてもそう思う」)を用いた。

(2) 疑問 2 の検証には、まず、ジャパニーズ・イングリッシュに対する態度を測定するため音声材料を作成した。日本人英語使用者男女それぞれ 11 名に中学校 3 年生用の英語教科書にある文章を読んでもらい録音した。この中から 4 名を選出するために、日本で英語教育に携わる英語母語話者 6 名(イギリス人 1 名、アメリカ人 4 名、カナダ人 1 名)に流暢さ(Smoothness)、母音と子音の発音の正確さ(Correctness of Vowels & Consonants)、リズムとイントネーションの正確さ(Rhythm & Intonation)に関して、その程度を 1 から 5 の数値で評価してもらった。各項目について英語母語話者の判断結果を平均し、1 位から 11 位まで順番をつけ、そのうち 1 位を最もネイティブに近い話者、11 位を日本語アクセントが最も強い話者とし、アクセントがよりネイティブに近い話者と日本語アクセントが比較的認められる話者各 1 名を選び、最終的に合計日本人男性 4 名の録音を使用した(パイロット・スタディを行った際に、女性の場合は英語のアクセントより声色に影響されるというコメントが複数あったため、本研究では男性に限定した)。

参加者は、疑問 1 のグループとアメリカ人の英語母語話者(42 名)、合計 332 名である。検証方法は、参加者らに 4 名の英語を聞いて、アクセントの強弱、理解、印象など 10 項目を 7 段階で評価してもらった。

4. 研究成果

(1) [疑問1の検証] 10項目を3つに分類し、まず、項目1 自信 (I am confident in my English pronunciation)、項目4 満足度(I am happy with my accent)、項目5 アクセントの保持(I would like to keep my accent)、項目7 ためらい(I hesitate to speak English because of my accent)の選択肢の分布割合を比較した。いずれの項目でも日本人グループは否定的であった。項目1(自信)は日本人以外のグループは肯定回答が多かった。中でもデンマーク人とマレーシア人のグループは肯定回答(4、5、6を選択)が98.0%と90.9%であった。一方、日本人は72%が否定回答(1、2、3を選択)で、自信の無さがうかがえる。

項目4(満足度)の結果は、項目1と同じように日本人グループは否定回答が65.9%に上り、満足度が低い。一方、マレーシア人グループは併せて84.8%が満足であると回答し、中国も肯定回答が否定的回答を上回った。同じアジアの国でも差があることがわかる。

項目5(アクセントの保持)には日本人グループの95.5%が否定しており(「1=全くそう思わない」25.0%、「2=そう思わない」36.4%、「3=どちらかと言えばそう思わない」34.1%)、アクセントを保持したいと思っていない。オーストリア、ドイツ、デンマーク、カザフスタンも50%から60%が否定回答であったが、日本ほど顕著ではない。一方、マレーシアは71.7%が肯定的(保持したい)であった。

項目7(ためらい)は、カザフスタンが程度の差はあるが、100%が否定しており、発話をためらわないという結果であった。否定回答はデンマークが89.6%、マレーシアが88.9%、オーストリアが83.9%、ドイツが77.8%、中国が73.6%であったが、日本は61.3%であり、他国に比べて低い割合となっている。否定回答の分布は、オーストリア、ドイツ、デンマークの大学生はそれぞれ51.6%、63.0%、54.2%、カザフスタンは47.6%が「全くそう思わない」

を選択しており、アクセントを理由に発話をためらうことが全くない。しかし、強い否定(非常にためらう)は中国が19.3%、日本が13.6%で、このことから日本人グループが英語のアクセントを理由に発話に対して消極的であることがわかる。

次に、選択肢1、2、3を「1」(否定回答)、4、5、6を「2」(肯定回答)とし、6つの選択肢を2値変数に再コード化し、それぞれの項目について二項検定を行った。その結果、項目1、4、5では日本人グループの否定回答が肯定回答を有意に上回っていた(それぞれ、肯定答者=12、否定答者=32、 $p=0.004$ 、肯定答者=15、否定答者=29、 $p=0.049$ 、肯定答者=2、否定答者=42、 $p<0.000$)。先の分布割合が示すように、二項検定の結果も日本人大学生の英語に対する自信、満足度、保持しようという気持ちが顕著に低いことを明らかにした。また、項目7については、日本以外の国で肯定回答が有意に否定回答を上回っており、アクセントのために発話に消極的になることはない結論づけられるが、日本人グループには有意差が認められなかったことから(肯定答者=17、否定答者=27、 $p=0.174$)、アクセントを理由に発話に消極的な学生が他国より多いと考えられる。

(2) 次にネイティブ・アクセントに関する項目2 (I speak English with a native-like accent)、項目3 (I have a non-native accent)、項目6(I would like to sound like a native speaker of English)、項目10 (Everyone should speak English with a native-like accent in intercultural communication)の回答結果を上述と同様の方法で分析した。項目2では、日本人グループの31.8%が強い否定を示した。それに続く「そう思わない」が38.6%となっており、全体で88.6%がネイティブのような発音ではないと回答している。マレーシア、中国、カザフスタンの大学生も否定回答が肯定回答よりも多いが、その程度はゆるやかである。また、

マレーシアと中国の否定と肯定の差(それぞれ 17.2 ポイントと 12.2 ポイント)は日本とカザフスタンほどの開きはない(それぞれ 77.3 ポイントと 43 ポイント)。一方、デンマークの大学生は 43.8%が「どちらかと言えばそう思う」を選んでおり、全体で 81.3%の肯定的意見となっている。二項検定の結果、肯定回答と否定回答に有意差があった国は、デンマーク、マレーシア、日本であった。しかし、デンマークは肯定回答が有意に多かった(肯定回答者=39、否定回答者=9、 $p<0.001$)が、マレーシアと日本は否定回答が有意に肯定回答を上回っていた(それぞれ肯定回答者=14、否定回答者=48、 $p<0.001$ 、肯定回答=5名、否定回答=39名、 $p<0.001$)。半数の日本人大学生が非英語母語話者のアクセントであるという見解を示している。続いて、47.6%のカザフスタンの大学生も非英語母語話者のアクセントであると回答している。

項目 3 の回答は、項目 2 で肯定的であったデンマークの大学生らの 70.9%が、非英語母語話者のアクセントは無いと回答している(「6=とてもそう思う」10.4%、「5=そう思う」29.2%、「4=どちらかと言えばそう思う」31.3%)。二項検定の結果、デンマークは否定回答が有意に多かった(肯定回答者=14、否定回答者=34、 $p=0.006$)。一方、マレーシア、日本、カザフスタンは肯定回答が有意に多かった(それぞれ、肯定回答者=48、否定回答者=14、 $p<0.001$ 、肯定回答者=39、否定回答者=5、 $p<0.001$ 、肯定回答者=18、否定回答者=3、 $p=0.001$)。上述の結果は、参加者らが項目 2 と項目 3 を反転項目として適切に回答していることを示す。

母語話者英語の発音への憧れを尋ねた項目 6 では、割合の比較、二項検定のいずれの結果からも程度に差があるものの、7 カ国全てにおいてネイティブ・アクセントへの願望があることが明らかになった。

項目 10 には、中国の 26.3%が「とてもそう思う」を選択し、皆がネイティブ・アクセ

ントで話すべきという意見を強く支持している。一方、ドイツとカザフスタンでは、それぞれ 40.7%と 38.1%が「そう思わない」を選択した。オーストリアとデンマークの回答には特に顕著な傾向はみられなかった。二項検定の結果、ドイツにのみ有意差が認められた(肯定回答者=7、否定回答者=20、 $p=0.019$)。その他の国では否定が有意に多いという結果ではなかったが、分布割合では否定回答が多い傾向が認められることから、本研究の参加者らは全体として「皆がネイティブのような発音で英語を話すべきである」という意見を支持しないと考えられる。

(3)理解について尋ねた項目 8 (Native speakers of English can easily understand my English regardless of my accent) と項目 9 (Non-native speakers of English can easily understand my English regardless of my accent)、の結果は、対話者が母語話者、非母語話者に関わらず肯定回答(理解してもらえる)が多かった。前者の場合、オーストリア、ドイツ、デンマーク、カザフスタンでは、「とてもそう思う」と「そう思う」の選択が合わせて 90%前後になり、マレーシアと中国では「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が多くなっている。一方、日本人大学生は、43.2%が「どちらかと言えばそう思う」、29.5%が「どちらかと言えばそう思わない」を選択しており、他の 6 カ国とは異なる分布であった。二項検定の結果、日本以外の国では肯定回答と否定回答に有意差が認められた。これは、日本人グループの「アクセントに関わらずネイティブに理解してもらえる」という認識の低さ、あるいは自信の無さを示唆する。一方、対話者が非英語母語話者の場合、日本人大学生は「そう思う」の回答が 9.1%から 31.8%に増えている。二項検定を行った結果、全てのグループで肯定回答が否定回答より有意に多かった。

(4) 英語を話すときに「英語母語話者のように話す」と「相手にわかってもらう」のい

れが大切であることを尋ね、その理由を記述してもらった。全体で 67 名が前者を、223 名が後者を選択し、国別では中国を除いた 6 カ国で 80% から 95% の参加者が後者を選択した。前者の理由には、誰でも理解できる、教養があると思われる、恰好いい、ネイティブの発音の習得は英語学習のゴールという記述があった。後者は、理解がコミュニケーションの前提、ネイティブの発音の不明瞭さに加え、アイデンティティと英語の多様化から自らのアクセントを肯定する記述もあった。特にこの記述はマレーシア人グループに顕著であった。日本人グループには「コミュニケーションはわかってもらえればよい」「コミュニケーションは通じればよい」という記述が比較的多く、相互理解ではなく一方的な自己内完結の傾向が示唆される。

(5) [疑問 2 の検証] 4 名の日本人英語話者はその日本語アクセントの程度によって、以下の順になる：Speaker B(最もネイティブに近い) Speaker C Speaker A Speaker D(最も日本語アクセントが強い)。まず、アクセントの程度(In terms of pronunciation, this person has a strong accent/sounds like a native speaker of English)、流暢さ(This person is not fluent/fluent in English)について、4 人の Speakers に対する判断を国別に一元配置分散分析と多重比較(5%水準)を行った結果、日本人グループと他の 7 か国の判断に大差はなかった。一方、理解のし易さ(This person is difficult/easy to understand in English)と慣れ(I am not familiar/am familiar with this person's pronunciation)については、日本人以外の 7 グループは、4 名に対して有意に異なる判断をしていたが、日本人グループに有意差は認められず、4 名とも同程度に理解でき慣れているという結果であった(各 Speaker の平均値は、理解度が Speaker A = 4.70, Speaker B = 5.04, Speaker C = 4.98, Speaker D = 4.73、慣れが Speaker A = 4.07, Speaker B = 4.64, Speaker C =

4.30, Speaker D = 3.82)。4 項目の相関関係について検定した結果、日本人の場合、理解と慣れには相関関係は認められず、それぞれが流暢さと相関関係にあった。

この結果は先行研究を支持するものである。例えば、McKenzie(2008a, b)の日本人英語学習者もジャパニーズ・イングリッシュは「理解しやすい」または「聞きなれている」と回答し、日本語アクセントが強い英語に親密さと好感を示していた。McKenzie(2008b)はこの結果を、日本人はジャパニーズ・イングリッシュを「標準英語」と比べると容認しないが、自分も日本人英語話者であり、ジャパニーズ・イングリッシュを話すという連帯感から心理的に日本語アクセントの英語を容認していると解釈している。

次に、聡明さ(This person does not sound/sounds intelligent)、自信(This person does not speak/speaks English with confidence)、国際ビジネスでの成功(This person could not be/could be successful in international business)、英語を聞いた印象(I feel irritated/comfortable listening to this person speak English)、話し方の好き嫌い(I do not like/like the way this person speaks English)、話してみたい気持ち(I would not/would like to talk with this person)について一元配置分散分析と多重比較(5%水準)を行った。その結果、中国とカザフスタンを除く 5 つのグループで、Speaker B(最もネイティブに近い)に対する評価が有意に高かった。中国は、全項目において Speaker B と Speaker C(Speaker B の次に日本語アクセントが無いと判断された話者)、Speaker A(Speaker D より日本語アクセントが弱い)と Speaker D(最も日本語アクセントが強い)に有意差はなく、カザフスタンは全項目で Speaker A と Speaker D に有意差が見られなかった。

8 カ国を比較して興味深い結果は、英語母語話者の平均値が他のグループより比較的

高いことである。そこで、一元配置分散分析と多重比較(5%水準)を行ったが、8群の比較であったことから、母語話者グループの平均値だけが特化して他のグループより有意に高いという結果にはならなかった。しかし、Speaker D(最も日本語アクセントが強い)に対する平均値が「慣れ」の項目を除く9項目において、他の7グループより高かったことは注目に値する。ただし、本研究に参加したアメリカ人が日本在住であったことが高い平均値につながった可能性は否めない。しかし、この結果は日本人英語学習者が抱く「英語母語話者にはジャパニーズ・イングリッシュを理解してもらえない」という危惧を払拭するモチベーションにつながる。

(6) [まとめ] 疑問1の回答として、自らの英語に対する自信、満足度、保持する姿勢に対して日本人グループは顕著に否定的(低い)で、発話に対して消極的であると言える。疑問2については、ネイティブの発音に近いと容認度、好感度も上がるが、英語母語話者の判断は日本人が危惧するほど低いわけではない。むしろ、本研究では他の非日本人グループより高い結果となった。これは、日本人英語学習者にとって励みであり、英語教育では、そのゴールを「母語話者英語の習得」ではなく、「理解のし易さ」に置き、否定的な言語態度の改革を目指すことが求められる。

本研究の結果は、ジャパニーズ・イングリッシュに対する自信をつけさせる指導と活動が急務であると示唆する。母語話者英語を絶対視し、その習得を目指す英語教育では、自らの英語、特に日本語アクセントに対する否定的言語態度につながり、ELFの正しい理解を妨げ、ELF使用者の育成を阻むものである。言語、文化、価値観を異にする人々とのコミュニケーションではお互いのELFを尊重することが大前提であり、これからの英語教育にはELFに対する寛容性の育成が求められる。

[参考文献]

- Chiba, R., Matsuura, H., & Yamamoto, A. (1995). Japanese attitudes toward English accents. *World Englishes*, 14, 77-86.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language: New models, new norms, new goals*. Oxford: Oxford University Press.
- Matsuda, A. (2003). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes*, 22, 483-96.
- McKenzie, R. (2008a). Social factors and non-native attitudes towards varieties of spoken English: A Japanese case study. *International Journal of Applied Linguistics*, 18: 63-88.
- (2008b). The role of variety recognition in Japanese university students' attitudes towards English speech varieties. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 29, 139-53.
- Seidlhofer, B. (2004). Research perspectives on teaching English as a lingua franca. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 209-239.
5. 主な発表論文等
- [雑誌論文](計1件)
- 柴田美紀, 英語教育における言語態度への取組み: 学習英語とリンガ・フランカ英語, *アジア英語研究*, 15巻, 査読無, 2015, 印刷中
- [学会発表](計2件)
- 柴田美紀, 非日本人英語学習者の「英語」に対する態度と「日本人英語」への理解度および容認度, 全国英語教育学会 第40回 徳島研究大会, 2014年8月9・10日, 徳島大学
6. 研究組織
- 柴田美紀 (SHIBATA MIKI)
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号: 90310961